第十一節　下絵切の位置

一

伝藤原公任筆下絵和漢朗詠集切（以下、下絵切と略称する）は堀部正二編著『校異和漢朗詠集』[1]によると「もと巻子本で、本文には誤脱もかなり多いが、他の諸本に比して著しく異なつた所が多い」伝本であるとされている。同氏は主に本文の関係性に注目して平安時代の書写とされる諸伝本を次のごとく分類した。[2]

(1)御物伝行成筆粘葉装本の系統に近きもの……粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切
(2)関戸家蔵伝行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの……雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本
(3)いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの

また久曽神昇氏は主に形態的な面から次のごとく大別した。[3]

甲類……雲紙本・関戸本・巻子本・葦手本（雲紙本・関戸本の一類と巻子本・葦手本の一類に分類）
乙類……粘葉本・近衛本・法輪寺切・伊予切

久曽神氏の分類の中に下絵切は含まれていないが、堀部氏は、下絵切を上記(1)・(2)・(3)のうちの「(3)いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの」に分類し、さらにその(3)について、「下絵切のごとく遺存する量の乏しき為本文系統の想定し得ないもの」、「(1)・(2)両者の特徴を混有して別系をなせる類」、「(1)・(2)に対し別系をなすにやと思しきもの」、「(1)・(2)とも相異し寧ろ鎌倉時代書写になる嘉暦本以下に近似する系統等、未だ全形を知り得ぬ為に断定を憚るの類を凡て含めて一群とする」と述べられた。[4]

一方、小松茂美氏著『古筆学大成』によると、下絵切は「近代に入ってから、その料紙の特徴をとらえて」命名されたものであり、またその書写年代については「十二世紀はじめ」、「『和漢朗詠集』の成立後、まだ八十年にも満たない」頃と推定さ

れている。同氏は書写内容における下絵切と延慶二年書写本（以下、延慶本と略称する）・伝二条為氏筆本（以下、為氏本と略称する）との同文箇所を指摘され、下絵切は「特異本文をもちながらも、『菅家所伝本』に密接な一本と推知することができる」と述べられた[5]。しかしそこに挙げられた事例はごくわずかである。平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本において下絵切がどのような位置にあるのかという点についても言及されておらず、先学の研究では下絵切の実態について未だ詳らかにされていないと言わざるを得ない。

著者は、前掲書『校異和漢朗詠集』・『古筆学大成』に未所収の若干の資料[6]を調査し得たことから、『和漢朗詠集』諸伝本における下絵切の位置付けについて検討を行った。本節ではその結果について述べる。

以下挙げる『和漢朗詠集』の詩歌番号は『新編国歌大観』に拠る。

下絵切について調査し得た箇所を集成し、詩歌番号順に並べると以下の通りである（一首の全姿を著者が確認し得なかった断簡についてはその番号を括弧に入れて示す[7]）。本節における調査はその範囲内とする。

（39）・40・42・85・86・118・131・132・137～140・182～（184）・185・188・189・191・193～（198）・203・207～（211）・216～220・227～240・260～262・274～284・286・287・291～294・301～306・336・341～（343）・344・344の次[8]・345・362～369・373～375・378～380・387～392・421～423・429・443～453・472～474・484～486・533・534・536・538・554～564・593・594・（615）～617・653～657

本節中、挙げる平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本に関わる事例の概要は次頁【平安時代書写本】の通りである。掲載順・伝本名（略称・略号、除く）は『古筆学大成』に拠る。

また鎌倉時代以降の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本（以下、後代の書写本と略称する）については次頁掲載の【後代の書写本】の通りである。

【平安時代書写本】

伝本名	略称	略号
伝藤原行成筆雲紙本和漢朗詠集	雲紙本	雲
伝藤原行成筆関戸本和漢朗詠集切	関戸本	関
伝藤原行成筆粘葉本和漢朗詠集	粘葉本	粘
伝藤原行成筆近衛本和漢朗詠集		近
伝藤原行成筆法輪寺切本和漢朗詠集		法
伝藤原行成筆伊予切本和漢朗詠集	伊予切	伊
伝藤原行成筆久松切本和漢朗詠集	久松切	久
伝藤原行成筆安宅切本和漢朗詠集	安宅切	
伝藤原行成筆金銀砂子切本和漢朗詠集		行金
伝藤原公任筆唐紙本和漢朗詠集切	唐紙切	唐2
伝藤原公任筆巻子本和漢朗詠集	巻子本	巻
伝藤原公任筆太田切本和漢朗詠集		太
伝藤原公任筆益田切本和漢朗詠集	益田本	
伝藤原公任筆大内切本和漢朗詠集	大内切	大内
伝藤原公任筆下絵和漢朗詠集切	下絵切	下
伝藤原公任筆散書和漢朗詠集切		散
伝藤原定頼筆山城切本和漢朗詠集	山城切	山
藤原基俊筆多賀切本和漢朗詠集		多
藤原定信筆戊辰切本和漢朗詠集切（巻下）	戊辰切	戊
藤原伊行筆戊辰切本和漢朗詠集切（巻上）	戊辰切	戊
藤原伊行筆葦手下絵和漢朗詠集	葦手本	葦

【後代の書写本】

伝本名	略称	略号
尊経閣文庫蔵伝寂然法師筆本		
尊経閣文庫蔵伝二条為氏筆本	為氏本	為
伝世尊寺行能筆墨流本		
専修大学図書館蔵高辻長成筆本	専修本	
冷泉家時雨亭文庫蔵本	冷泉本	
西尾市岩瀬文庫蔵延慶本	延慶本	延
西尾市岩瀬文庫蔵弘安本	弘安本	
大東急記念文庫蔵嘉暦本	嘉暦本	
阪本龍門文庫蔵本		
天理大学附属天理図書館蔵貞和本	貞和本	
逸翁美術館蔵伝藤原行成筆本		
逸翁美術館蔵伝藤原伊房筆本	伊房本	
逸翁美術館蔵伝世尊寺行能筆本	行能本	
逸翁美術館蔵伝二条為親筆本	為親本	
今治市河野美術館蔵伝寂蓮筆本		
今治市河野美術館蔵伝久我長通筆本		
今治市河野美術館蔵伝紹巴筆本	紹巴本	
東北大学附属図書館蔵伝兼好筆本	兼好本	
東北大学附属図書館蔵覚恕親王筆本		
京都府立京都学・歴彩館蔵本		
国立国会図書館蔵菅原長親書入本	国会本	
宮内庁書陵部蔵本（503.167）	宮内本Ⅰ	
宮内庁書陵部蔵本（503.1）	宮内本Ⅱ	
陽明文庫蔵伝浄弁筆本	浄弁本	
名古屋市蓬左文庫蔵伝二条為重筆本		
名古屋市蓬左文庫蔵山崎宗鑑筆本	宗鑑本	
某氏蔵正安二年奥書本	正安本	

二

まず詩歌句の有無・排列に関する調査・考察結果について述べる。

詩歌句の有無・排列において諸伝本間に異同がある箇所のうち、いずれかの伝本一本のみが他本と異なるのは、誤写、または後人の追補による可能性が高い。以下、下絵切と諸伝本との関係を探りたく、いずれか一本のみが他本と異なる場合を除くと【詩歌句の有無】・【詩歌句の排列】について、諸伝本間には次のような異同が確認される。

【詩歌句の有無】の項目では詩歌番号とともに当該詩歌句を挙げ、諸伝本におけるその有無の区別を示す。その次に挙げる【詩歌句の排列】の項目では排列上の異同を主に詩歌番号で示す。

【詩歌句の有無】

①42「礙石遅来心竊待　牽流遄過手先遮」(9)
雲紙本・関戸本に無いが、その他の伝本にはある。(10)

②182の次「去歳今年不変何　郭公暁枕駐声過」
専修本・延慶本・嘉暦本・貞和本・伊房本・行能本・国会本・正安本にはあるが、その他の伝本には無い。

③207の次「秋の夜をあかしかねつゝなくむしはしのひにものやおもはさるらむ」
為親本・兼好本にあるが、その他の伝本には無い。

④344の次「誰家思婦擣秋帛　月苦風凄砧杵怨」
下絵切・専修本・国会本・正安本にあるが、その他の伝本には無い。

⑤380「班女閨中秋扇色　楚王台上夜琴声」
雲紙本・関戸本に無いが、その他の伝本にはある。

⑥422の次「琴商改曲吹煙後　蕭瑟催心学雨辰」

益田本・山城切・為氏本・専修本・冷泉本・延慶本・嘉暦本・貞和本・紹巴本・国会本・浄弁本・宗鑑本にはあるが、その他の伝本には無い。

⑦449「飢鼯性躁悤々乳　老鶴心閑緩々眠」

雲紙本・関戸本に無いが、その他の伝本にはある。

⑧534「孤花裏露啼残粉　暮鳥栖風守癈籬」

雲紙本・関戸本・戊辰切・葦手本に無いが、その他の伝本にはある。

⑨535「荒籬見露秋蘭泣　深洞聞風老檜悲」

雲紙本・巻子本・下絵切に無いが、その他の伝本にはある。

⑩564「山さとはふゆこそあはれまさりけりひとめもくさもかれぬとおもへは」

雲紙本・関戸本に無いが、その他の伝本にはある。

⑪617「人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深」

安宅切・巻子本に無いが、その他の伝本にはある。

【詩歌句の排列】

(1)巻上・春部巻末部分の排列について、「落花」・「藤」・「躑躅」・「款冬」の順（132～143）である伝本は粘葉本・伊予切のみである。下絵切は「落花」・「躑躅」・「款冬」の順（132・137・138／(ii)139・140）であり、唐紙切は「款冬」・「藤」の順（143・133～136）であるが、そのような断簡等を除くとその他の伝本は「落花」・「躑躅」・「款冬」・「藤」の順（132・137～143・133～136）である。

(2)紹巴本・兼好本が198・197の順であるのに対してその他の伝本は197・198の順である。

(3)延慶本・弘安本・兼好本・宮内本Ⅱ・宗鑑本が294・293の順であるのに対してその他の伝本は293・294の順である。

(4)粘葉本・近衛本・伊予切・久松切・山城切、及び後代の書写本（一五本）では533・534・535・536の順であるが、雲紙本は

533・536の順であり、534・535が無い。巻子本・下絵切は535が無く、533・534・536の順であり、関戸本・戊辰切・葦手本は534が無く、533・535・536の順である。後代の書写本には、533・535・534・536の順のものもあり、また533・534・536・535の順のものもある。

以上挙げた事例のうち、まず注目すべきは【詩歌句の有無】における④の事例（344の次）である。当該句は、平安時代書写本のうち、下絵切にのみ見られるが、そのことは著者の知る限りでは先学の研究において未だ指摘がなされていない[12]。山田孝雄氏のご指摘の通り、当該句は「後人の加筆」と言えよう。しかし、「尊圓親王以後のしわざなるべきなり[13]」とされた山田氏のご指摘については、（当該句が下絵切に存しているため）訂正されるべきであろう。

下絵切では、当該句「誰家思婦擣秋帛　月苦風凄砧杵怨」に続けて345「八月九月正長夜　千声万歳無止時」が書されている。それらは『白氏文集』巻十九「聞夜砧[14]」を典拠とする。典拠におけるその両句の順序は下絵切と同じであるが、専修本・国会本・正安本ではその順序が下絵切とは異なる[15]。既述した通り、小松茂美氏により下絵切と為氏本・延慶本との共通性が指摘されたが、為氏本・延慶本は当該句を有していない[16]。

また為氏本・延慶本は前掲【詩歌句の有無】のうちの⑥（422の次に位置する句）を有するが、今回、調査し得た下絵切の断簡（421～423）の中にその句は存しない。また、⑨（535）も下絵切には見出せないものである。当該句は雲紙本・巻子本にも無い。

雲紙本・巻子本は既述した通り、堀部氏(2)・久曽神氏甲類に分類されているが、本事例からあるいは下絵切も雲紙本と同類であろうかと想像される。前掲【詩歌句の排列】(1)に挙げた排列のみならず、【詩歌句の有無】⑨の事象からもそのように推測する。

十一世紀中葉の書写とされる雲紙本・関戸本（以下、雲紙本類と呼称する）と粘葉本・伊予切（以下、粘葉本類と呼称する）との違いのうち、顕著であるのは、前掲【詩歌句の排列】(1)に見られる巻上、春部巻末の三詩歌群の排列のことが挙げられる。

その排列について、先学の所説の中の、堀部氏(2)・久曽神氏甲類（雲紙本類）は「躑躅」・「款冬」・「藤」であり、堀部氏(1)・久曽神氏乙類（粘葉本類）は「藤」・「躑躅」・「款冬」である。

下絵切の同一断簡内に「落花」の次に「躑躅」があり、また「躑躅」の次に「款冬」があることが確認される。そこから下絵切は当該箇所について雲紙本類と同排列であった可能性が高いと言える。しかしながら以上挙げた事例のみでは下絵切が雲紙本類の系譜上に位置する伝本であるとは判断し得ず、個々の本文の調査も行う必要がある。

なお、前掲【詩歌句の有無】①・⑤・⑦・⑩に挙げた詩歌句は雲紙本・関戸本にのみ存しない。既に本書中、指摘した通り[17]、平安時代の書写とされる諸伝本において、雲紙本・関戸本の二本にのみ存しないのは一〇首に上り、当該句（四首）はそこに含まれる。その四首を持たない伝本について、平安時代の書写本のみならず、後代の書写本においても雲紙本類の他には見当たらないということが明らかとなった。

三

本項では個々の本文について述べる。

下絵切と諸伝本との本文関係をみるために、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を行った。その際、異体字・略字、及び漢字と仮名との違い、仮名遣いの違いについては実質的異同と同レベルでは扱えないため、異同とは見做さない（例えば219「あひ見る」と「あいみる」は異同とは見做さない）こととした。後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字[18]、同筆と認められない文字等についても原則、異同判定の際、その対象から外した。

下絵切について、堀部正二氏により「本文には誤脱もかなり多いが、他の諸本に比して著しく異つた所が多い[19]」との指摘がなされたものの、その事例は示されていない。堀部氏のその指摘は以下のごとき本文を指すものと思われる。86「花かそみる」、137「自」、194「泰」、203「まかするあふきの」、216「去夜衣」、228「いはねのゝへの」、229「はなのしたつゆ」、274「以」、

280「あやなくあやの(タ)」、294「おもひけも」。このような事例が脱字・衍字も含め、下絵切には少なからず確認される。

ところで雲紙本類と粘葉本類とが対立関係にある場合、下絵切には雲紙本類と粘葉本類の本文の混在が確認される。以下、その事例を挙げる。

まず下絵切と雲紙本類との同文箇所についてである。下絵切の詩歌句を挙げ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間における異同を載せる。当該本文を有する平安時代書写本の略号を括弧内に示し、各事項の末尾には当該箇所に関する他文献の本文を載せる（他文献の漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等についてもよみ方に相違がないと判断される場合は原則、異同とは見做さずに表記する）。

①137晩蘂尚開紅躑躅　秋房始結自芙蓉（下）

〈同〉始（雲・関）

〈異〉初（粘・伊・久・巻・山・戊・葦）

＊『白氏文集』巻十六、「初」。

②227俗恭漸忘浮花味　楚練新(20)擣伝声（下）

〈同〉俗（雲(21)・関・巻・葦）

〈異〉蜀（粘・伊・久・山・戊）

＊『私注(22)』、「蜀」。

③276文峰案轡白駒影　詞海艤舟紅葉声（下）

〈同〉影（雲・関・山・戊）

〈異〉景（粘・伊・久・巻・多・葦）

＊『私注』、「景」。

④364此火応鑽花樹把　対来終日有春情（下）
〈同〉日（雲・関・久・葦）
〈異〉夜（粘・伊・巻・戊）
　　日夜（山）
＊『私注』、「夜」。
⑤536向晩簾頭生白露　終霄床底見青天（下）
〈同〉晩（雲・関・巻・太・山・戊）
〈異〉暁（粘・近・法・伊・久・葦）
＊『私注』、「晩」。
⑥538きみなくてけふりたえたるしほかまのうらさひしくもみえわたるかな（下）
〈同〉みえわたるかな（雲・関・巻・太・山・多・戊・葦）
〈異〉なりにけるかな（粘・近・法・伊・久）
＊『古今集』巻十六[23]・『貫之集』Ⅰ・『古今六帖』第四[24]・『三十六人撰』、「見え渡るかな[25]」。
⑦554遺愛寺鐘敲枕聴　香鑪峯雪撥簾発[26]（下）
〈同〉撥（雲・関・久・巻・山・戊・葦）
〈異〉巻（粘・近・伊）
＊『白氏文集』巻十六、「撥」。

①～⑦のうちの⑦の当該箇所には粘葉本類の本文の特異性[27]が窺われるが、①・④・⑤の下絵切・雲紙本類の本文は文意から誤写による本文かと思われる。

次に下絵切と粘葉本類との同文箇所を挙げると以下の通りである。前項同様の記載内容、方法により事例を挙げる。

(1) 85さくかりあめはふりきぬおなしくはぬるともはなのかけにかくれむ（下）
〈同〉ぬるともはなの（粘・伊・久・行金・巻・大内・山・多・戊・葦）
〈異〉もるともはなの（雲・関）
＊『拾遺抄』巻一・『拾遺集』巻一・『古今六帖』第一、「ぬるとも花の」。

(2) 86あをやきのえたにかゝれるはるさめはいともてぬける花かそみる（下）
〈同〉はるさめは（粘・伊・久・行金・山・多・戊・葦）
〈異〉はるさめを（雲・関・巻）
＊『古今六帖』第六、「はる雨を」。『伊勢集』Ⅰ、「春さめを」。『伊勢集』Ⅱ・Ⅲ、「春雨は」。

(3) 118欲謂之水　■則漢女施粉之鏡清瑩　欲謂之花　亦蜀人濯文錦粲爛（下）
〈同〉濯（粘・伊・巻・戊・葦）
〈異〉洗（雲・関・久・山）
＊『本朝文粋』十、「濯[28]」。

(4) 194鳥下緑蕪秦苑寂　蟬鳴黄葉漢宮秋（下）
〈同〉寂（粘・伊・久・山・多・戊・葦）
〈異〉夕（雲・関）
　　静（巻）
＊『全唐詩』巻二十、「夕[29]」。

(5) 196歳去歳来聴不変　莫言秋後送為寒[30]（下）

〈同〉歳（粘・伊・久・巻・多・戊・葦）
〈異〉年（雲・関・山）
＊『私注』、「歳」。

(6)260よにふれはものおもふとしもなけれともつきにいくたひなかめしつらん（下）
〈同〉つきにいくたひ（粘・伊・久・巻・散・多・戊）
〈異〉いくたひつきに（雲・関・唐2・山・葦）
＊『拾遺抄』巻十・『拾遺集』巻八、「月にいくたひ」。

(7)280をみなへしおほかるのへにやとりせはあやなくあやのなをやたつへき（チナム）（タ）（下）
〈同〉なをやたつへき（粘・伊・久・多・戊・葦）
〈異〉なをやたちなむ（雲・関・巻・山）
＊『古今集』巻四・『古今六帖』第六、「名をやたちなむ」。

(8)302黄絞纈林寒有葉　碧瑠璃水浄無風（下）
〈同〉風（粘・伊(31)・久・巻・葦）
〈異〉塵（雲(32)・関・山・戊）
＊『白氏文集』巻二十四、「風」。

(9)342雖愁夕霧埋人枕　猶愛朝雲出馬鞍（下）
〈同〉愁（粘・伊・久・巻・山・戊・葦）
〈異〉然（雲・関）
＊『私注』、「愁」。

⑽366うつみひのしたにこかれしときよりもかくにくまるゝをりそわひしき（下）
〈同〉をりそわひしき（粘・伊・久・巻・戊・葦）
〈異〉をりそかなしき（雲・関・山）
＊出典未詳

(1)〜⑽のうちの(1)・(9)は雲紙本・関戸本の誤写であると見られる。(5)・(8)も下絵切の本文が本来の姿であったと推測する。また(4)・(7)の下絵切の当該箇所については、粘葉本類との一致が注目される。

一方、「雲紙本類と粘葉本類とが同文であり、その本文が下絵切と異なる場合」もある。そこでは下絵切と十二世紀の書写とされている伝本（久松切・巻子本・山城切・戊辰切・葦手本等）との一致が確認され、またその中には後代の書写本との一致も見出すことができる。以下、その事例を挙げる。

まず下絵切の詩歌句を挙げ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間における異同を載せる。当該本文を有する平安時代書写本の略号を括弧内に示す。伝本名の記載は平安時代書写本のみとし、後代の書写本については平安時代書写本と同文であれば略号の下に「／」を付し、当該本文を有する伝本の数を記す。平安時代書写本との間に異同がある場合は当該本文を記し、括弧内に当該本文を有する後代の書写本の数を記すが、伝本によっては当該詩歌句が存在しない場合もある。

①（39）翫風流　蓋志之所之　謹献小序云尓（下）
〈同〉献（戊・葦／18）
〈異〉上（雲・関・粘・伊・久・巻・山／8）―上[献]（1）
＊『菅家文草』巻五、「上」[33]。

②183さつきやみおほつかなきにほとゝきにほとゝきすなくなるこゑのいとゝはるけき（下）
〈同〉いとゝはるけき（戊／23）

〈異〉いとゝはるけさ（雲・関・粘・伊・久・巻・山・葦／2）

＊『万葉集』巻十、「おとのはるけさ」。

③197なつやまのみねのこすゑのたかけれはそらにそせみのこゑはきこゆる（下）

〈同〉みねのこすゑの（巻・山・多・戊／26）

〈異〉みねのこすゑし（雲・関・粘・伊・久・葦）

＊出典未詳

④219ひとゝせにひとよとおもへとたなはなたのあひみるあきのかきりなきかな（下）

〈同〉あひみるあきの（1）

あひみるあきの（久・戊・葦／14）

〈異〉あひみむあきの（雲・関・粘・伊・巻・山・多／8）―あひみむことの（2）―あひ見る秋は（1）

＊『拾遺集』巻三・『貫之集』Ⅰ、「あひ見む秋の」。『古今六帖』第一、「あひ見る秋の」。

⑤238あしひきのやまとりのをのしたりをのなかくしきよをわかひとり○ぬる（下）

〈同〉なかくしきよを（山／13）

〈異〉なかなかしよを（雲・関・粘・伊・久・巻・大内・多・葦／10）

―なかくしきよ（戊）―なかくし■を（1）―なかくしよひを（1）―なかくしよも（1）

＊『万葉集』巻十・『拾遺集』巻十三・『古今六帖』第二・『人麿集』Ⅰ・Ⅱ、「長々し夜を」。

⑥294あさかほをなにはかなしとおもひけもひとをも花はさこそみるらめ（下）

〈同〉さこそみるらめ（多・戊・葦／25）

〈異〉いかゝみるらむ（雲・関・粘・伊・久(34)）―いかゝ見るらん（山）―いかかおもはむ（1）

＊『拾遺集』巻二十、「さこそ見るらめ」。

⑦345八月九月正長夜　千声万歳無止時（下）

〈同〉止（山／5）

〈異〉了（雲・関・粘・伊・久・巻・戊・葦／14）―了止（1）―已（1）―畢（2）―休（1）―畢了止（1）

＊『白氏文集』巻十九、「了」。

⑧375銀河沙漲三千界　梅嶺花開一万株（下）

〈同〉界（久・巻・戊／25）

〈異〉里（雲・関・粘・伊／2）―里界（山）―眼（葦）

＊『白氏文集』巻二十三、「里」。

⑨559山路日暮　満耳者樵歌牧笛之声　澗戸鳥帰　遮眼者竹煙松霧之色（下）

〈同〉暮（久・山／23）

〈異〉落（雲・関・粘・近・伊・巻・多・戊・葦／1）

＊『本朝文粋』十、「暮」。

以上の下絵切の本文のうち、後代の書写本との同文例について、多い順に挙げると③、⑥、⑧、②、⑨等がある。⑥「さこそみるらめ」は、片桐洋一氏により「『拾遺集』『拾遺抄』の本文において対立し問題になっていた本文」であり、そこでの「本文研究の結果がそのまま〈和漢朗詠集〉に現れている本文だと思う」と述べられ、「鎌倉期写本」の本文であると指摘されたものである。[35]

また⑧「界」については、柿村重松氏は「誤写」であると説かれた[36]が、川口久雄氏は『日本古典文学大系』の頭注において「私注以下諸本〈三千界〉に作る。三千里とすると平面的。三千大千世界とすると深みがます。わが国の人は後者に解したらしい」

と注された[37]。下絵切の本文「界」が誤写であるのか、あるいは改訂されたものなのか不明ながら、柿村氏が「集註には三千界とある。謡曲空也にも三千界とあるから、當時は已に一般にかく變じて居たと見える[38]」と述べたごとく、後世、下絵切の本文「界」が普及したことは確かである。

また⑨「暮」については堀部正二氏により「平安朝後期より漸次変形転訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌」と評された事例の一つであるが[39]、平安時代書写本中、「暮」は十二世紀の書写とされる下絵切・久松切・山城切にしか見出し得ない本文である。

下絵切と十二世紀書写本との同文例が後代の書写本に普及したことが確認されたが、以下述べる題についても同様なことを指摘し得る。『和漢朗詠集』は百余りに部類分けされ、その中でそれぞれに立てられた題の下、各詩歌句が採録されている。巻上「冬」の題のうち、「氷付春氷」のごとく、「氷」の下に、小字にて付記されている「春氷」が下絵切・山城切・戊辰切では本文中、独立した一題目として立項されている。その「春氷」について堀部氏は「後世的な要素」と述べられた[40]。

それを踏まえ、後代の書写本を取り上げ、当該箇所における目録[41]中の題とそれに対応する本文中の題について、その異同調査を行った。その結果をまとめると次の通りである（書写内容、及び当該事項を有する伝本の数を挙げたものである）。

【題「氷」・「春氷」等を有する伝本数】

題	目録中（伝本数）	本文中（伝本数）
氷付春氷	23	2
氷付春氷	2	0
氷付春氷 春氷	1	17
氷付春氷 春氷	0	1
氷付春氷 春氷	0	1
氷 春氷	0	6

本調査結果によると、本文中、「春氷」が立項されている伝本数は二四本である。元来、付項目であったはずの「春氷」が本文中、独立しているのは、補筆[42]を除くと平安時代書写本では下絵切・山城切・戊辰切の三本のみであったが、その事象は後代の諸伝本では多く見られた。

一方、小松茂美氏によって指摘された（本節中、既述した）延慶本・為氏本と下絵切との関係について、近しさが窺われる事例も確認される。本節中、「雲紙本類と粘葉本類とが同文であり、その本文が下絵切と異なる場合」について取り上げた際、下絵切と十二世紀書写本との同文箇所を挙げたが、例えばその事例に注目するならば、下絵切はそのうちの②・③・④・⑥・⑧・⑨が延慶本と同文であり、②・③・④・⑤・⑧・⑨が為氏本と同文である（なお、⑥・⑦の詩歌句は為氏本には見当たらない）。

しかしながら、下絵切と両本との間にはそれぞれ異文もある。

下絵切（略号：下）、延慶本（略号：延）の順に当該本文を挙げると以下の通りである。207けふをおもへは（下）-けふとおもへは（延）、227俗（下）-蜀（延）、238わかひとり○ぬる（下）-ひとりかもねん（延）、341晩（下）-暖（晩イ）（延）、345歳（下）-声（延）、345止（下）-已（延）、390みきはまされり（下）-みきはまされる（延）、558鷺（下）-鷗（延）。

次に下絵切、為氏本（略号：為）の順に当該本文を挙げると以下の通りである。137始（下）-初（為）、138寒（下）-康（延）、140初（下）-誤（為）、197こゑはきこゆる（下）-なくこゑはする（為）、210暁（下）-晩（為）、302風（下）-塵（為）、305もみちしにけり（下）-いろつきにけり（為）、375開（下）-排（為）。

下絵切には雲紙本類、粘葉本類それぞれの本文の混在が確認された。また十二世紀の書写とされている諸伝本と下絵切との同文箇所も確認され、その中には後代の書写本と一致している場合があるということも判明した。しかし延慶本・為氏本が下絵切と近い関係にあるという所説については首肯し難い。

四

堀部正二氏により「恐らく鎌倉時代に普く行はれ勢力を有つてゐたのは菅家系統の伝本」であること、鎌倉期の書写本の中には菅原家の訓釈を注したものが甚だ多いことが指摘されており[43]、当代、菅家本の勢力大であったものと思われる。しかしながら下絵切が「菅家所伝本に密接な一本」かという点については判断し得ない。確かに後代の伝本に影響を与えたと推測するが、延慶本・為氏本はその中の一本に過ぎず、延慶本・為氏本が下絵切と特段近い関係にあるという結論は得られなかった。

下絵切には十一世紀中葉の書写とされる雲紙本類、粘葉本類の本文の混在が確認された。また十二世紀の書写とされる伝本（久松切・巻子本・山城切・戊辰切・葦手本等）との同文箇所も確認された。その中には、後代、普及したものがあるということも明らかとなった。

本節中、指摘した白居易の句「誰家思婦擣秋帛　月苦風凄砧杵怨」、及び本文中の題「春氷」が『和漢朗詠集』の原本には存しなかったということは既に先学の研究において指摘されている。前者は平安時代の書写とされる諸伝本中、下絵切のみが有し、後者は下絵切・山城切・戊辰切が有する。その事象は多くの後代の『和漢朗詠集』書写本に確認された。本調査結果から下絵切の類が後代へ与えた影響の一端について窺い知ることができた。下絵切には多くの誤写が存するものの、その書は実に個性的であり、類例がないことに加え、平安時代書写本のうち、形態・本文において過渡期に位置するという点においてその資料的価値は高いと言えるであろう。

注

（1）堀部正二編著『校異和漢朗詠集』［昭和56年　大学堂書店］36頁。なお、同書によると下絵切は「鳥の子紙に金銀切箔を極めて少なく撒いた上に、銀泥で蝶鳥草木等を描いて下絵」としたものとされている。

（2）前掲書（注1）、312・313頁。

（3）久曽神昇著『仮名古筆の内容的研究』［昭和55年　ひたく書房］189・190頁

（4）前掲書（注1）、313頁。

（5）小松茂美著『古筆学大成』第一四巻［平成2年　講談社］369～372頁

（6）黒木安雄編『書苑』十巻四号［大正8年8月　法書會］・『栗山家愛蔵品入札目録』［昭和10年2月　東京美術倶楽部］・古筆学研究所編『過眼墨宝選集』1［昭和62年　旺文社］・『過眼墨宝選集』5［平成元年　旺文社］・古谷稔監修『古筆手鑑　披香殿下』［平成11年　淡交社］

（7）393～396については、『古筆学大成』には釈文のみの掲載（図版、未所収）のため、本調査の対象外とする。

（8）344の次に位置する「誰家思婦擣秋帛　月苦風凄砧杵怨」を指す。当該句、『新編国歌大観』に無く無番号。『新編国歌大観』に無く無番号の詩歌句の番号について、以下、当該句の場合と同様に「の次」として示す。なお当該句は、『新編国歌大観』番号に従うと、344の次に位置している。しかし344の次には題「擣衣」が存する。当該句は下絵切では「擣衣」の中の冒頭に位置するものであり、その前の題「霧」に配されてはいない。

（9）当該句は下絵切に書されている詩句を翻字したものである。以下、下絵切が当該句を有する場合は下絵切の詩歌句を翻字するが、下絵切に存しない場合は各項の冒頭に挙げた伝本の詩歌句を翻字する。また行間、及び欄外に本行よりも小字にて書されている場合も本行のものと区別しないこととする。以下、同。

（10）錯簡、落丁による場合、及び断簡等により無いものは本調査の対象外とする。以下、同。

（11）138と139は別の断簡に位置するため、138と139の順、不明。

（12）近年の研究成果としては恵阪友紀子「『和漢朗詠集』の享受―詩歌の増補と大江匡房―」（『関西大学東西学術研究所研究叢書第5号　日本言語文化の「転化」』［平成29年　関西大学東西学術研究所］所収）が挙げられるが、そこでも本項についての指摘は見られな

い。

（13）山田孝雄校訂『倭漢朗詠集』［昭和14年　岩波書店］15頁

（14）謝思煒校注『中国古典文学基本叢書　白居易詩集校注』第四冊［平成18年　中華書局］に拠る。

（15）当該句の位置について、専修本では345の次、国会本では350の次、正安本では346の次（小字による欄外の書き込み）である。

（16）ただし、為氏本では当該句、及びその近辺が脱落しており、未確認。

（17）本書、24～26頁。

（18）本稿中、翻字の際、判読不可能な文字については「■」を用いて示す。

（19）前掲書（注1）、36頁。

（20）「新」か。判定し得ない文字については以下、同様な表記とする。

（21）雲紙本、「俗」の右に本文とは別人の手による傍書「蜀」がある。

（22）『和漢朗詠集私注』の略称。当該書は山内潤三・木村晟・杤尾武編『和漢朗詠集私注』［昭和57年　新典社］に拠る。以下、同。

（23）以下、勅撰集は『新編国歌大観』に拠る。特に断りのない限り、私家集は『私家集大成』に拠り、私撰集は『新編国歌大観』に拠る。

（24）宮内庁書陵部編『図書寮叢刊』［昭和42年　養徳社］に拠る。

（25）久松潜一校『公任歌論集』第四九冊［昭和2年　古典文庫］に拠る。

（26）『過眼墨宝選集』1（40頁）では「看」と翻字。

（27）前掲書（注17）において指摘した。163頁

（28）大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系』27［平成4年　岩波書店］に拠る。以下、同。

（29）［清］彭定求等編『全唐詩』［昭和35年　中華書局］に拠る。

（30）『古筆学大成』第一四巻（352頁）では「空」と翻字。

(31) 伊予切、「風」の右に本文とは別人の手による傍書「塵イ」がある。
(32) 雲紙本、「塵」の右に本文とは別人の手による傍書「風」がある。
(33) 川口久雄校注『日本古典文学大系』72［昭和41年　岩波書店］に拠る。
(34) 久松切、「いかゝ」の右に別人の手によると思しき傍書「さこそ」がある（『古筆学大成』第一三巻〈428頁〉参照）。
(35) 陽明文庫編集『陽明叢書　国書篇　第七輯　和漢朗詠集・新撰朗詠集』［昭和53年　思文閣出版］10頁
(36) 柿村重松著『和漢朗詠集考證』［昭和48年　藝林舍］322頁
(37) 川口久雄校注『日本古典文学大系』73［昭和44年　岩波書店］143頁
(38) 柿村重松註『倭漢新撰朗詠集要解』［昭和6年　目黒書店］57頁
(39) 前掲書（注1）、323頁。
(40) 前掲書（注1）、283頁。
(41) 伝本の中には巻頭の内題の次に、部類名・題の一覧を有するものが存する。その一覧のことを目録と仮称する。
(42) 久松切、「春氷」が本題目として補筆されている。その補筆は別人の手によると思われる（『古筆学大成』第一三巻〈428頁〉参照）。
(43) 前掲書（注1）、33・310頁。

［謝辞］
資料の閲覧、調査に際し、左記の各所蔵機関にお世話になりました。記して御礼申し上げます。
尊経閣文庫　西尾市岩瀬文庫　大東急記念文庫　京都府立京都学・歴彩館　宮内庁書陵部　名古屋市蓬左文庫
本節中、引用した漢籍の出典についてご教示頂きました片倉健博氏（日本大学）に御礼申し上げます。